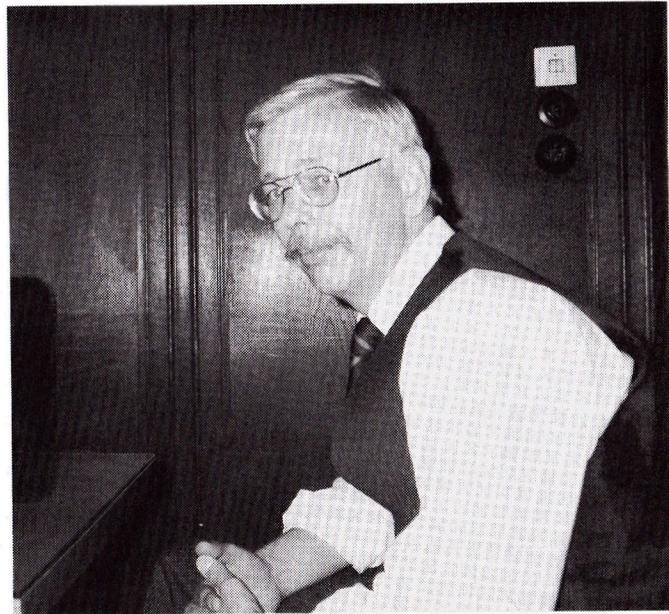


♣ D D R 作家協会会長代理

ベルント・フォン・キューゲルゲン氏



— ここ半年に起きた出来事によって D D R 文学では何が変わったのでしょうか？

それはお答えしにくい質問ですね。今の時点では、我々自身これからどうなっていくのか答えが見つからない問題がたくさんあるのです。

三月一日から三日まで、協会の臨時会が開かれました。会議の焦点は協会の新規約でした。協会は民主的かつ超党派の団体として存在することとなり、会員の利益を代表するものとしての使命を負います。主な活動は指導部ではなく会員が行うものとなります。基盤となる組織は各地方の協会で、これはしきに各州の協会となります。その他には小さな理事会と小さな事務局があります。初めの基盤としてはこんなところでしょうか。

— お話のような協会組織は別として、私などは文学ないしは作家の方々ととりまく環境がどの様に変ったのか、ということのほうに関心があります。今までは作品の内容に関して外部からの強制がかなりあったと思います。すでに多少そういった政治的・イデオロギー的な強制というものが自身の中に組み込まれてしまっていた人もいたと思いますが、今ではその種の強制は全部なくなってしまうわけですか？しかし、その代償というのはいかがなものでしょうか？

— たようなことで、影響が現れるにはまだ時間がかかることでしょうか？

もう一つ、作家を取り巻く環境の中で変化化したものがあります。出版社が倒産してしまったのです。ヒンシュトルフ社等も一例です。D D R の出版社は銀行口座を持っていませんでした。自分が要らないと思えば、銀行にお金を持たなくても良かったのです。国から補助金を貰い、純益を計算し、もし利益が出た場合には他の出版物を出版するために使うか国に返還していました。財政面の蓄えはまったくありませんでした。ヒンシュトルフ社は毎月毎月繰り返し自問してきました。『我々まだ支払い能力があるのだろうか、それとももう駄目なのだろうか？我々は倒産したのか？』と。ヒンシュトルフ社が抱えていた作家達の作品は、もともとは北ドイツの地方文学に過ぎず、その分野に強い出版社は西ドイツにもたくさんありますし、そちらがすぐに市場を制覇してしまうでしょう。または、フォルク&ヴェルト社などは翻訳で成り立っていました。そのクオリティは高く、世界中で認められていました。従業員は非常に長い時間をかけて翻訳に取り組むことができました。この出版社は翻訳権を持つことで成り立ってきたわけですが、そういう出版社は西ドイツにもたくさんあるのです。簡単にいってしまえば、市場の問題なのです。より良く、より早く動けるものが本を売ることができ、本を売ることができるもの

— 作家にとって最も大きく変わった点は、文学の使命ないしは機能のうちの一つですが、社会を批判し、国民の良心となり、もはや創作の中心とはならず、ここ何年かのように新聞の代わりとして表面に出ることもなくなることです。前は他のメディアがカバー出来ない分野も文学が代役を果たしてきましたし、人々が現在の問題や歴史上の問題、社会についての問題等に関して抱えている自分の意見と同じものが描かれているのを見るために文学を読んでいました。文学はそのため、矛盾に陥ってしまいました。文学であり、芸術であることと、利用され、メディアの代替として矢面に立たされることの矛盾です。後者の役割は今ではなくなりました。

— どういう状況になると、社会に対する批判をこれからも続けていくことが出来るのでしょうか？

— 批判を完全に捨ててしまったわけではありません。文学もそうですが、機能の仕方が変わったのです。今まで『社会に対する批判』という口実の下に芸術的価値は余りない書物がたくさん著されています。しかし、世間の要求はそれで満たされていたのです。こういった文学はむしろ、現在は厳しい立場に立たされています。今までのこの『文学』と本来の意味でのこれから我々が目指す文学とで、一番大きな差異ないしは矛盾が今述べ

のが生き残るのです。DDRの出版社すべてがこの問題に直面しています。出版社の規模は縮小され、フォルク&ヴェルト社の従業員は一五〇名から三十五名に縮小）編集者達は作家に付き合うことのできる時間が少なくなっしまいました。状況は切迫しており、DDR文学の本の売上だけが七五%も減ってしまった本屋もあります。するともちろん作家にも影響が出てきます。増刷されなくなり、執筆の注文も来なくなってきました。半年前には「最新作！必読！」とされたような本でさえ同じです。執筆の契約が取り消されるのも、発行部数が最小限に押さえられるのは目に見えているからで、全体の発行部数自体が落ち込んでいるからです。以前は発行部数一万部は当たり前でしたが、最近では三千部から五千部が普通になっていきます。

DDRでは詩人達も一生懸命働きさえすれば詩作だけで食べていけました。しかし西ドイツで詩作だけで食べている、という詩人は聞いたことがありません。西ドイツにはさらにフリーの翻訳家というのはほとんどいません。市場も大きければ競争相手も多く、速さや質などを要求される事柄も多いのです。これらはみな、実際に作家の仕事に科せられる質的な条件と密接に結び付いている問題なのです。今やたくさんのフリーの作家仲間が新しい仕事、つまりお金を稼ぐための手段を新たに探さなければならぬ状況にあります。ほとんどの人は今のところ

それに、もしこの国の印刷業界と一緒に仕事をしている人ならば、非常に興味深い原稿も出版されるまで三、四年はかかることを知っているはずですから、半年前に新作として出版されたものでも、もうちょっと面白くなくなっています。(二三年前に書かれたものから)

― 変革の時代というのは興味深いのですが、確かに書物の時代ではないのでしょうか。最近ここで起こったことは、人々は皆頭の中で整理することは出来ても、気持ちの上ではまだほとんど整理できていません。頭脳と感情を同時に働かせなければならぬ作家の方々は、現在の時点では物を書くための精神面の落ち着きが得られないのではないかと思います。

もちろんそうです。しかし、私は今の時代を文学の暗黒にしてしまいたくないのです。優秀な、しかもすでに名声のある著述家というものは自分の意見を主張するでしょうし、これからも優秀な作家であり続けようとするでしょう。しかし、優秀でありながら今書くことが難しい、という作家達や、特別な労働条件が必要な作家達、またはともあれ成功しなければならぬ若い人々―質も伴わなければなりません―にとっては根本的に難しい状況にあるでしょう。確かに、本当ならチャンスがあったであろう才能が、こここのところの変化のせいで可能性

ろまだ仕事がありますが、十年もフリーしていると…ちょっと社会の中を見回してみるだけで、企業の中がどの様になっているかすぐわかるはずですが。作家がきちんと会社に入ろうとした場合、どの様なチャンスがあるのでしょうか？または生計をきちんと立てることができ、なおかつ小説を書くための時間をとっておけるような仕事を見付けようとした場合には？これらすべて、我々に課せられている条件なのです。契約システムは変わるでしょうし、著作権協会はなくなってしまうかもしれません。

翻訳者同士の交流ないしは交換派遣のための東西ドイツ翻訳者会議というのを開きました。DDRでは翻訳者というのは高い地位にありますが、西ドイツの中でDDRにいるのと同じくらい稼いで同じくらいの生活水準を保とうと思ったら、三倍は働かなければならないでしょう。しかし、それは無理なのです。三倍多く働こうとしたら、もう緻密に作業を進めることは出来ませんし、将来的にはもっとたくさんやれと言われるでしょうから。

さらにもう一つ厄介なことがあります。社会変革の時代というのは、読書の時代ではないのです。人々はテレビばかり見て、自分達自身の問題で手一杯で、お金を使うといったら消費財を買うのみです。まあ全部納得のいく行動です。しかし、ある作家の作品がまあ三年、本屋の店頭には並ばないとしたら、その作家がその後再び名前を知られるようになるのは大変難しくなってしまう。

がなくなってしまう、途中で落伍してしまうケースが多くなっています。情勢が固まればまた、きつとまったく様相が変わると思いますが、現時点で最も大きな問題といえ、例えばこの先一体文化というものはどうやって財源を得るのだろうか、ということ。どうやって振興されていくのでしょうか？例えばフランスのように市場経済が確立されている国々では、何かのコンクールや物質的な危機の際には、文化振興財団が手段を講じています。そうすると、芽が出たばかりの才能のある若い人達のサークルがあるわけですが、その人達を支援していくことができるのです。私達の国にはまだそういったサークルはありません。私達の国では今まで、国がそういう文化の援助を行っていました。今度は地方自治体が文化面の責任を税金でもってすべて負うべきなのですが、地方自治体がそういう風に税金ですべてを賄うことができるようにする法律はまだないのです。将来的にどうやって地方自治体が税金から文化に補助を出す義務を負うのか、

保険衛生制度であるとか教育制度の貧しさをみるとはなはだ疑問です。倒産してしまっただ会社からは税金は入らないし、地域のためにそれらを立て直すにはまたお金がかかるし…。こういった変革の過渡期の一番ひどい状態が回復するにはあと二、三年から四年はかかるでしょうし、この時期が文学にとって、また文筆家が生き残るために一番危険な時期でしょう。後から何が出てくるかに

ついては心配していません。文筆家はどの国にもいますし、いつの時代にだっていることでしよう。

DDR文学の特徴とは一体なんでしょう？特徴的だったとすれば、DDRの文学が果たすべき一つの機能があつた、ということぐらいでしょう。一つの機能、といっても数ある中のたまたま一つに過ぎませんでしたが。それを除けば、DDR文学も「ドイツ文学」というカテゴリーの中に含まれてしまいます。確かに良い本はありましたが、あまりにも少なかった。我々はこれから、文学を自覚めさせ、メジャーにするために今までにないくらいに強くメディアに訴えていかなければなりません。

作家協会は後援団体を設けました。この団体の一番最初の成果は、「文化促進法」を制定させたことです。この法律は、前の人民議会が制定したのですが、地方自治体だけではなく国家も文化促進、そしてそれに見合った額の助成金拠出の義務を負うことを定めたものです。新しい内閣はこの法律を踏まえた上で文化業務に取り組みなければなりません。現在でも文化省という役所がありますが、これからは内務省と共同で政務を行っていく可能性もないとはいえません。

— 西ドイツには文化省はないのですか？

西ドイツには州単位で文化省があるだけで、この役所

は教育省でもあります。連邦全体では内務省があるだけです。

— 統一の過程の中で文化省がなくなってしまうとお考えではないですか？

その事も考えていますが、今のところはまだ存在していますし、活動の可能性はまだたくさんあります。今の時点で重要なのは、財政面での規定を作り、そのために努力することです。例えば、一対一の通貨交換率を実施されたら、どんな事が起きるでしょうか？作家達は一対一で交換してもらうような給料は一切もらっていないのです。作家達は銀行に口座を持っていて、生活費はそこに前もって払い込まれるのです。謝礼という形で振り込まれ、次の謝礼が振り込まれるまで通常二三年はそのお金で暮らしていくのです。しかし、四千マルクまでしか一対一で交換されないなら、すぐ足りなくなってしまうのは目に見えています。こういったことも我々の要求の一つです。その他に、家賃に関する要求もしています。今年中に、それもまた早い時期に、新しい家賃が設定されるでしょう。その結果家賃は上がるでしょう。この問題の場合、作家は自分の仕事部屋が必要だ、ということも前提として考えなければいけないと思います。二部屋のマンションに三人で住んでいる家で作品を書く、とい

うことはできないのです。作家にとって仕事部屋は、欠かすことのできない基本的な条件として、そのための助成金を受けることができる、とするのも我々の要求の一つです。もしくは、その家賃を税金の対象外とする可能性を開いてもいいのではないかと。今挙げたのはたった二つの例に過ぎません。さらに、芸術家協会を公共組織として一般に広める必要があります。そうすれば、財政面で新しい可能性も生まれてくるかも知れません。すべてがまったく新しい状況なのです。我々の協会の使命は、文学にとって最善の環境を作り出すために努力することです。物質的な意味だけでなく、何等かの疑いをかけられていたり他のメディアによって辛い立場に立たされている仲間達をかばったり、協会自体をメジャーにすることもそうです。今日では皆新聞の記事を追いかけています。前は聖書の中に神の言葉を探すようにして作家の言葉を求めていたのですが、今ではまったく違ってしまいました。本の批評というのもし残されていくべきです。

しかし、多くの問題を抱えているにもかかわらず、今は文学にとって素晴らしい時代です。一つの世紀の間に、今のような変革がそうしょっちゅう起きるものではありません。半年前にはこれから何世紀も続くであろうと思われたれっきとした国家体制を築いていたものが、たった半年で転覆してしまい、集中国家体制から議会民主制に移行し、いや、移行を余儀なくされる、という状況が

そうそう体験できるでしょうか？人間の運命もそれと無関係であるわけがありません。多かれ少なかれ、左右を見回すだけで小説の材料がごろごろしているのです。しかし、それを小説ないし何らかの文章にしても、世に出るには五六年ないし七年はかかるでしょう。本や詩を書く、というのは時間のかかる作業なのです。材料は充分にあるし、才能のある作家であれば、あとはただ書き始めればいだけなのです。只、今は彼等も政治的に活動していますからね。

DDR文学は、何世紀も読み継がれていく文学を送り出しています。クリスタ・ヴォルフの『カサンドラ』等はこの先何十年も読み継がれていくでしょうし、まあ『障害』という作品などは、チエルノブイリの原発事故に関するドキュメンタリー的な性格が強いので、難しいかも知れませんが。クリスタ・ヴォルフ、シュテファイン・ハイム、ギュンター・クネールト、クリストフ・ハン等の本は今でも売っていますが、先ほど申し上げたように、DDR文学全体としては七五%も購読数が減っている、という状況です。

(九〇年四月二十三日)